

中島 金太郎 提出 学位申請論文

『地域博物館史の研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は、日本博物館史を構築する上で不可避である都道府県ごとの地域博物館史把握の重要性、地域博物館研究の具体的研究方法とその要件を明確にすることを根底に置き、静岡県を事例として論究したものである。

したがって、静岡県の博物館史を例に取りながらも、一方では日本博物館史の構築にも迫真した意欲的な論文である。

当該研究は、上記の目的で中央の歴史よりもさらに小範囲である都道府県を範囲とし、近代博物館成立以前から現代に至るまでの地域博物館史を地方史の一環として把握することに努めながら、大型展示空間を有する東京・京阪・中京の博物館史を一部比較しながらも論究している。

本論の構成は、終章を含めた 11 章から構成されている。

第 1 章は、本研究を遂行するにあたり、都道府県単位の地方史としての博物館史構築の意義と目的を定義する中で、地域博物館の現状分析と地域博物館史研究の歴史と研究方法を概観している。

その中で、広く博物館学研究の形態は、かつてより先行研究を検討しない事例研究が先行しており、博物館に関わる理論や技術論研究はもとより博物館社会の背景となる時代的特色や博物館を生んだ社会の特質等

の把握については比較的低調であると主張する

また、実践研究と並び博物館の歴史を対象とした博物館史研究も盛んに行われており、博物館史研究の濫觴は明治37年（1904）に内田四郎が『建築雑誌』に寄稿した「繪畫陳列館」を嚆矢とし、また棚橋源太郎に端を発する我が国の全国的視野での博物館史の構築は、川崎繁や伊藤寿朗の研究を経て、『博物館学講座2 日本と世界の博物館史』の刊行によって一応の研究成果が世に問われたと記している。また、昭和後期から平成初期には、各県の博物館史を研究する潮流があったものの、執筆に関する明確な統一基準が存在せず、不十分な結果となってしまう点を厳格な視点で検証して指摘している。

以上を踏まえ、論者は改めて各県単位の綿密な博物館史構築の必要性和研究内容における要件を提起している。我が国の博物館史研究は、全国的な歴史と細分化された市町村単位での博物館史や個別博物館の歴史の蓄積は多いが、その中間に相当する県単位の博物館の歴史研究は相対的に希薄であるとし、これに対し各県の博物館の歴史を全国的に構築することで、我が国の詳細な博物館史の蓄積と地域性の把握が可能となり、また細分化された地域史や各館史は、それらが所属する地域としての傾向把握や比較材料の提供などに繋がるとしている。

第2章は、「博物館設立前史」と題し、江戸時代から明治時代を中心とする広義の展示を行った施設や催事について展示史的観点を以って論を展開している。具体的には、近代以前の開帳から、明治政府の殖産興業を目的に全国的に設置された“物産陳列館”や“博覧会”等々の催事、

図書館や公民館などの社会教育施設に付帯する展示施設を主対象として扱っている。

博物館設立前史にあたる上記諸施設の例として、静岡県に所在した各種展示施設を例示している。当該県の物産陳列館は、当初静岡県立館が設けられたものの、明治時代中期には静岡県が補助を行って、その機能を掛川・浜松・富士の県庁所在地以外の地方に分散させるといった他県に見られない方式を確立した点に着眼して、独特の発展を遂げたことを新たに導き出している。

このように、博物館設立前史にあたる諸施設・催事場は、基本的な機能において博物館に近似、あるいは影響を与えたと考察する。また一方で、当該諸施設は博物館の代替として永らく機能したことを明確にし、この点は静岡県独自の形態であると断じている。その上で、これら諸施設の活動があったからこそ一般市民へ、展示やモノの観覧が浸透し、その結果、昭和40年頃に博物館施設が設けられる遠因になったと結論付けている。

続く第3章から第9章は、博物館を専門領域による館種ごと七種に区分し、それぞれの専門領域博物館の出現と発達史、および設立に至る社会的要因、発達の傾向、歴史的意義などについて、東京・京阪との比較から考察・検討している。

第10章は、これまでの各種博物館史を踏まえ、地域博物館の全体的な傾向とそこから発生する課題について再考している。当該博物館の抱える横断的な課題として四点の課題を例示し、県民性や地理的・歴史的

背景に基づく地域博物館の問題点を明確化すべく論考を試みている。

地域博物館の中には、観光型博物館が非常に多く設営されているものの大半の博物館は地域との繋がりはなく、その必要性に疑問を感じる施設が多々存在している点も指摘している。また、公立博物館においても、地域・郷土との関わりが不十分な館が少なからず存在している。論者は、これらの現状を踏まえて、地域住民に愛され活用される博物館の必要要件についても考察している。

以上のように、今日山積している博物館学上での問題を解決するためには、先ずは地域博物館機能論の確立が最優先であり、それには地域博物館史を再度顧みることが重要であると論者は結論している。

終章は、全体を簡単に総括し、今後の検討すべき課題に触れた内容になっている。

#### 論文審査の結果の要旨

明治5年（1872）に始まる我が国の博物館の歴史は、論者が指摘するように一部には地域博物館史は認められるものの、その主体はあくまで中央である東京に限定された“日本博物館史”であり、全国的な視野で地域博物館史の総合的な研究がなされていない現状に於いて、提出論文は個別の事例を詳細に検討しながら、その基礎を作り上げた手堅い研究であるといえる。

本論は、博物館設立前史にあたる近世から現代に至る博物館および博物館に関する歴史を単一的に時間軸で表すのではなく、博物館・考古館・美術館・科学館・動物園・水族館・植物園・神社博物館・学校附属博物館と広く“博物館”に位置付けられている館園をも網羅したうえで、博物館の館種ごとの歴史をそれぞれ検証し、複眼的視座から地域博物館史を構築した点が構成上での特徴である。

殊に、本論の根幹をなす大正時代までの博物館史に関する文献渉猟は極めて意欲的で、未知の文献を多数見出すと同時に市町村史は勿論のこと、新聞・市町村広報誌・各種観光パンフレット・会社史・絵ハガキ等々の時事的な史料をも綿密に博搜しており、この点を以てしても当論文の博物館学上の果たす意義は大きいと評することができよう。

第1章は、明治5年に開始される博物館の歴史の研究である博物館史と、明治8年に栗本鋤雲により記された「博物館論」を嚆矢とする博物館学史研究の必要性を論じた章であり、我が国の博物館史研究の歴史（博物館史史）を概観したうえで、先行研究を綿密に検証している。

博物館史研究の歴史については、明治初期から現在に至る博物館史研究の主要論を提示したうえでの論究で、大筋では認証できる内容となっているが、一部に遺漏も散見される。この点は、今後の課題であることは確認するまでもない。

続く、戦後の博物館史研究の節においては、各博物館が自館の歴史を纏めた『〇〇博物館百年史』といった自館史が除外されている点からも網羅性の欠如が指摘できる。また、戦後から平成時代に至る間の博物館

史に関する研究論文は、膨大な件数が発表されているにも拘わらず、紙幅の関係もあったのであろうが単行本に重点を置いた展開がなされた点が残念である。この点で、明治時代から昭和前期までと終戦後から平成までの博物館史史の内容において、密度の違いを読む者に与えるのは事実であろう。この点については今後の精査に期待したい。

続く第2章は、博物館の成立前史にあたる内容を纏めた章であり、開帳・物産陳列館・博覧会といった博物館以前の展示と展示施設を挙げ、それぞれの事例の特質と博物館への変遷や関係について論証している。開帳に関しては、焼津所在の高草山法華寺の開帳や斎藤月岑の『武江年表』に記された出開帳の記録を中心に近世の展示行為について述べているが、全体的に事例の渉猟が不十分で内容に於いても先行研究を到底凌駕するには至っていない部分も存する。

物産陳列館および博覧会に関しては、新聞史料や当時の時事的刊行物を中心に多数の事例を報告している。論者が例として取り上げた静岡県では、県が費用を補助して県内各地に物産陳列館を設置するといった他県では認められない特徴を有している一方、博覧会は日本各地で開催された地方博覧会と同様の形態で催行するなど、両者の間に相反するとも把握できる特徴を明確にした。ただ、これらは論者が渉猟した多くの新資料に裏付けられ、資料的価値が高い反面、分析が新聞などの時事史料に偏りをみせ、各地の公文書などに物産・陳列などの史料の存在が十分予想されるところから、かかる史料の分析があったならばさらに深化した研究となり得た可能性は十分にあった。

第2章では、近世・近代の博物館設立前史において、図書館・公民館等の社会教育施設に付帯した展示施設についても論究している。社会教育施設に付帯する博物館類似の展示施設は、明治43年に設置された静岡県教育会付設図書館陳列室が濫觴であることと、その後平成28年(2016)までの間に三十余施設が設立された点を明確にし、作成された一覧表は貴重な成果である。

博物館史に関する先行研究では、社会教育施設である図書館・公民館に併設された展示施設に視座が及んだ例は殆ど認められず、この点でも論者の独自の視点を垣間見ることが出来る。

第3章から第9章は、博物館の出現と展開を博物館の専門領域ごとに論述しており、従来の地域博物館史には存在しなかった観点であり、当該要点の欠落こそが既存の地域博物館史が希薄化する一因であったことを解明している。

つまり、従来地域博物館史は概ね考古・歴史・民俗博物館に限定されていたのに対し、自然史博物館・科学博物館・美術館・動物園・植物園・水族館、さらには学校附属博物館・大学附属博物館・図書館等に代表される社会教育施設附属展示室(郷土室等)をも含めたことにより、将に地域博物館を網羅した点が本論の特徴の一つである。

第3章の歴史系博物館や第4章の自然史・科学博物館は、文献調査だけでなく積極的な実踏に基づく成果が垣間見えるものであり、やや批判的ではあるが現状批評と今後の展望を具体的に論究している点は高く評価される。

さらに、“地域”・“博物館”・“観光”の三者を一体的に扱った博物館の歴史を実践した点でも、独自性を有していると評価できる。つまり、昨今急激な進展を見せる“観光学”に対し、現代史に軸足を置いた博物館学的視座を加味することにより、論者特有の新たな博物館学の地平を見出した点は、斯界に寄与する思想である。

本論文の考察にあたる第10章は、地域博物館の歴史的傾向を詳細な分析を踏まえて、人口減により疲弊する地域社会での地域博物館の在り方について、交流人口の核となるべく地域博物館の要件論を展開している。本論では、博物館史を通じて県民性の把握や観光と博物館の関係を論じた上で、公立博物館の博物館経営に関する問題提起や職員問題についても論究しており、論者が掲げる「現代の博物館が抱える様々な課題を解決する糸口を見出す」ための地域博物館史研究を実践した論文であるとも言えよう。

また、博物館による“郷土意識の涵養”といった明治時代の博物館発生源からの基本理念でもあり、21世紀に入り脆弱となっている当該理念を、今こそ再確認すべきであるとする論者の博物館思想が確認でき、博物館の歴史を背景として次代に向けての博物館論を展開していることは、論者ならではの問題提起であると把握できよう。

終章は、全体を総括し今後の検討すべき課題に触れているが、地域博物館の傾向分析から抽出した問題に対し、将来展望の部分で明確な解決策が示されておらず、問題点の分析に関しても不足感が否めない箇所も少なからず存在する。

以上、本論文には前記してきた如くのいくつかの課題や問題点が指摘できるものの、これらは論者が今後の研究において乗り越えるべき課題であり、地域博物館史研究の新たな地平を拓いたことは歴然たる事実で、本論の先進性や論者が新たに渉猟した史料に基づく論理の独創性を決して損ねるものではない。

よって、本論文の提出者中島金太郎は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成 29 年 12 月 23 日

主査	國學院大學教授	青木 豊	㊞
副査	國學院大學教授	根岸茂夫	㊞
副査	お茶の水女子大学名誉教授 國學院大學大学院客員教授	鷹野光行	㊞
副査	長崎国際大学教授 國學院大學大学院兼任講師	落合知子	㊞

中島 金太郎 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の諮問を行った結果、本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学力を有することを確認した。

平成29年12月23日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	青木 豊	㊟
副査	國學院大學教授	根岸茂夫	㊟
副査	お茶の水女子大学名誉教授 國學院大學大学院客員教授	鷹野光行	㊟
副査	長崎国際大学教授 國學院大學大学院兼任講師	落合知子	㊟